

北西海岸先住民の現代における歓待について

－ フィールドワーカーの経験からの覚書 －

立 川 陽 仁

【要旨】 この研究ノートは、人類学者でありフィールドワーカーである私自身の経験をもとに、フィールドの住人であり、すぐれた歓待をおこなう人びととして名高い先住民族であるクワクワカワクゥから私自身が受けてきた歓待の在り様を分析するものである。

1 はじめに

本稿は、歓待の精神に富むといわれる北米先住民のなかでもとりわけ「大盤振舞」や「寛大さ」で有名なクワクワカワクゥ（Kwakwaka'wakw）の現代における歓待の在り様を、当該社会でフィールドワーカーとして歓待を受けてきた私自身の経験から探っていこうとするものである。

〈私〉という一人称単数を排除することで、エスノグラフィに客観性の装いをまとうていくというトリックが「ポストモダン人類学」によって暴かれた現在でも、フィールドワークをおこなう人類学者がエスノグラフィのなかで「私」という語を使い、みずからの経験を語ることは少ない。フィールドワーク中に人類学者が経験した主観的な出来事を書く機会はあるにはある。しかしそれらは「論文」ではなく「エッセイ」に押し込められているように思う。そのような状況において、私みずからが歓待を受けた経験をもとに、歓待する側の歓待の在り様について語ろうとする本稿の試みは、異例なのかもしれない。本稿が「論文」ではなく「研究ノート」として発表されるのは、まさにそのためである。

本稿では、1999年以來クワクワカワクゥのあるコミュニティが私に対しておこなってきた歓待の在り様が論じられ、検討に付される。ここですぐさまいくつかの問いが生まれる。まず、「そもそも歓待とは何だろうか」という問いが浮かぶだろう。そしてこの問いをさらに押し進めると、こうなる——「あるべき歓待ないし、本来の歓待とは何だろうか」。

1999年以來、私はクワクワカワクゥのコミュニティを10回以上訪問しており、滞在期間は合計で25ヶ月以上にもなっている。すでに彼らと儀礼的な契りも交わした。だから少なくとも、私が彼らに歓待されたこと、受け入れられたことは事実として受け入れていいことだろう。しかしそれが「あるべき歓待」と呼んでよいものかということ、話は別になる。私が受けてきた歓待とはどのような性質のものだったか。この点は改めて検討しなくてはならない。そこで次節ではまず、人類学および哲学における歓待論の学史をふまえつつ、「歓待とは何か」という問いを探ってみよう。

2 歓待をめぐる学史

2-1 人類学の歓待論

人類学は、その黎明期から「人間全般についての学問」であることを標榜し、その方法論としてまず他者理解を掲げた。この傾向は1920年代の「近代人類学」の勃興と同時に強化され、以後、人類学者自身による他者世界での長期間のフィールドワークが「義務化」されることになる。したがって、それ以後「人類学者」を名乗る人物のすべてが長期のフィールドワークを経験しているとみて間違いない。そしてフィールドワークの最中は現地社会に溶け込むべきということになっているから、すべての人類学者はみずからが当該社会から歓待を受けた経験をもつはずである。

それにもかかわらず、人類学者は歓待というテーマを遠ざけてきた。それと同時に、他者について（民族誌という形で）いろいろ論じてきたにもかかわらず、「他者とは何か」という根源的な問いに手をつけてこなかったように思う。歓待の問題も他者の問題も、その根源的なところは哲学に任せっきりであった。先述したように、論文のなかに自己についての言及を載せることが著しく客観性を失わせる行為だと考えられてきたからである。現にこの伝統は、いまなお（われわれ大学教員が学生にレポートや論文を指導する際にも）生きつづけているように思われる。「私」という一人称は、せいぜい本の序論、結論、注のなか、あるいはエッセイのなかだけに押し込められてきた。これが現実である。

もう少し理論的な理由もある。カンディアとダコルは、歓待に関する論集の序論でこうつぶやいている——「もしモースが1924年に書いた論文の主題として贈与ではなく歓待を選んでいたら、いまの人類学はどうなっていただろうか」（CANDEA and DA COL 2012: 51）。もちろんここで語られているのはマルセル・モースが発表した傑作「贈与論」のことである（モース 2009）。本来、贈与と歓待は表裏一体のものである。贈与のない歓待はなく、歓待のない贈与もない。人類学史を少しでも学べば、「贈与論」が人類学史に多大な影響を与え、その後贈与に関するおびただしい数の研究を生みだすきっかけになったことが容易にわかるが、歓待を主題としたものはきわめて少ない。カンディアとダコルの「たら・れば」は生産性のないつぶやきにすぎないが、そうだとしても、贈与と歓待の密な関係を考慮すれば、彼らのつぶやきもおおいにうなずける。

歓待についての研究がほぼ皆無だった20世紀の人類学において、唯一歓待を正面からとりあげていたのがピット＝リバーズであろう。地中海の歓待について論じた1968年のエッセイのなかで、彼は後にとりあげるデリダの歓待論の大枠をすでに論じていた。フィールドワーカーとしての彼をスパイではないかとみる現地社会の疑いと、客として歓待しようとする精神の諸刃について深く論じた上で、ピット＝リバーズは歓待にまつわる法と自発性、「神なるよそ者」と法などの緊張関係の神秘さを「神性」（deity）、「感謝」（thanks）、「優雅」（grace）という言葉で表した（PIT-RIVERS 1968, 1992）。微妙な違いはあるが、彼の仕事はデリダの諸概念、たとえば後述する敵意の歓待と共通したところが多々ある。しかし人類学でピット＝リバーズの仕事が顧みられるのは、後述するように、ごく最近になってからのことであった。

2-2 歓待とは——哲学における歓待

人類学者が歓待というテーマを遠ざけてきた一方で、哲学では古くから他者論、そしてその

他者を受け入れる行為としての歓待が熱烈に議論されてきた。ごく最近の歓待論を首謀したのは紛れもなくデリダであるが、デリダはフランスの労働移民制限に対する批判から、カントが『永久平和のために』（1985）のなかで言及した「歓待」、つまり客にさまざまな条件を課すような、条件・制限付の歓待という考え方を批判的に検討し、レヴィナスの「無限性」にもとづく他者論（レヴィナス 2005）を再検討する過程で、歓待のあるべき姿について論じている（デリダ 1999）。ここで露になったデリダ流の歓待本来の特性とは、簡単にいえばつぎの2つの特性をもつものとして理解できる。第1に、その無限性ないし無条件性がある。それはつまり、主は客の「名前も聞かず、条件もつけず、ただただ相手の欲するままに」もてなす在り様である。第2に、「敵意の歓待（hostipitality, 敵意 hostility と歓待 hospitality をかけたデリダの造語）」（デリダ 1999: 77）が示すように、歓待とはもてなしと死、主と客、親密さと敵意が入れ替わるある種の両義性を備えたものとして理解できる点である。この論の根幹にあったのは、他者とはわれわれが取り込もうとするとすり抜けてしまう無限の拡がりをもった存在という、先のレヴィナスの他者論であったのはいうまでもない。

ごく近年になり、デリダの歓待論は人類学を刺激しはじめている。シュリョックがベドウィンの歓待についてすぐれた論文を残した後（SHRYOCK 2008）、イギリスの学会誌 *Journal of Royal Anthropological Institute* でも 2012 年に歓待についての特集が組まれた。

シュリョックがベドウィン社会でのフィールドワークを通じて論じた歓待は、まさにレヴィナスやデリダが主張した歓待の本質、つまり無条件かつ無限で、なおかつ親密さと死が隣り合わせの両義的なものとしての歓待という認識を裏づけるものであった。さらにシュリョックはこう結論する——「歓待とはつねに遠い土地、遠い過去にあるものなのだ」と（SHRYOCK 2008: 415-416）。シュリョックの論は、ベドウィンという歓待に長けた社会でのフィールドワークにもとづいた、人類学でしかできない研究であったと位置づけられるだろう。なお、本稿では以下、ベドウィン社会にみられるような、無条件かつ無限の歓待を「デリダ的歓待」、反対に条件付の歓待を「カント的歓待」と呼ぼう^①。

3 私とクワクワカクゥ

シュリョックのとりあげたベドウィンと同じように、北米の先住民も歓待の精神に富む人びとであったということは、多くの探検家、軍人、植民行政官らの手記から明らかである（モーガン 1990: 第2章）。これら先住民のなかでもとりわけ歓待および寛大さで知られるのが北西海岸、つまり北部太平洋沿岸部に住む先住諸集団であった。

北西海岸の先住民の寛大さを象徴するのがポトラッチという儀式である。ポトラッチは本来、出生、成人、結婚など人生の節目を跡づけるための儀式で、当該者のいる集団がホストとなり近隣に住む人びとをゲストとして招く。ここまでは日本の通過儀礼でもよくある話だが、ポトラッチの特殊性は、儀式期間中のあらゆる出費をホストが担うこと、そしてそのホストによるゲストへの出費の量（あるいは金額）が莫大になるということである。ポトラッチの最後には、いまでもホストからゲストに贈り物が与えられるのだが、その贈り物を積み上げると軒の高さにまで達したというのは有名なエピソードである（BOAS 1897）。

バーネットがいうに、ポトラッチの根底にあるのは寛大さの精神であった（BARNETT 1938）。だからホストは、破産を省みずに莫大な財を用意するだろうし、他方でゲストも、た

とえもらった財の量が少なくてもそれに不満を述べることはない。それは寛大さの精神に反する恥ずべき行為だからである。

しかも、報告された事例からは、ポトラッチの歓待が単なるもてなしではなく、シュリョックが紹介したベドウィンの例と同様、それが親密さと敵意との両方を露にする場であったことがわかる。財を与える代わりにゲストを罵りながら破壊するというあの有名な行為はまさに、ホストにとってゲストはもてなすべき隣人であると同時に蹴落とすべき敵であったことを物語っている（HUNT 1906）。

このように考えると、クワクワワクゥをはじめとする北西海岸の先住民もベドウィンと同様に、デリダが示した歓待の根源的な在り様を具現化した〈歓待の民〉であったように思える。しかし、このことについては詳細な検証が必要であろう。ポトラッチという儀式に渦巻くさまざまな歓待の掟が、本当にデリダ的な歓待、つまり無限で両義的な掟なのだろうか。その詳細な検討は別に機会におこなうことにして、ここではポトラッチがそのような装置であるとみることに私が懐疑的であるということにとどめておこう。むしろここで私は、先住民の歓待をめぐるそのほかの問いをあげておきたい。たとえばこのような問いである。ポトラッチ以外の日常生活における歓待はどうか、さらには、近代合理主義がはびこる、まさに〈いま〉を生きる先住民たちもそうなのか。以下では、フィールドワーカーとしての私が受けた歓待の諸例から、ポトラッチ以外の側面に関して、これらの点を検討してみようと思う。

3-1 私を歓待する —— ファースト・コンタクト

ここでは、クワクワワクゥのあるコミュニティが私を歓待してきた在り様について、私自身の経験から述べていこうと思う。まずは1999年の、私と彼らの最初の接触について振り返ってみたい。

【1】1999年の春、私は翌2000年に予定していた本格的なフィールドワークのための人脈づくりのためにカナダのキャンベル・リバーという町に3か月滞在した。2か月がすぎたある日、私は現地地のネイティブ・エスノロジストとして著名な女性Dと面会することができた。簡単な自己紹介の後、彼女の書いた本について1時間ほど話した私は、その1週間後にアラート・ベイという村でおこなわれる大規模なポトラッチと一緒にいかないと誘われた。私が「ぜひいきたい」というと、さっそくDは私の寝る場所を確保してくれた。コーモラント島の一角にあるアラート・ベイという村の人口は500人。ポトラッチ当日はその村に5,000人の来客が見込まれていた。村に宿は2つしかない。だから宿が手配できなければ、ポトラッチをみにいくことは不可能であった。

私の寝床は、Dの兄であり、またDが属す親族集団のチーフでもあるBの漁船だった。この漁船には寝台が9つあり、そのうちの1つが私にあてがわれた。当日、Bの長男Hが家族とともにその船でアラート・ベイにやってくることになっていたのである。

ポトラッチの前日の15時ごろ、私はDの車でアラート・ベイに到着した。ただ、私が寝ることになっている船がまだアラート・ベイに到着していなかったので、時間つぶしのためDは私をアラート・ベイの彼女の親戚の家につれていってくれた。どの家でも私はたくさんの食事を与えられ、そしてそのすべてを平らげた。船が到着したのは19時ごろで、船に私を届けると、Dは私に厚手の寝袋を渡して去っていった。船では屈強な男た

ちが見たこともない体長2メートルもある大きな魚（あとでオヒョウだとわかった）を捌いていた。それだけで私を怖気づけさせるには十分だった。みな私が見えていないかのようには作業をしていた。手持ち無沙汰の私は、寝台に荷物をしまおうと甲板で彼らの作業を観察していたが、とくに誰も私に話しかけてこなかった。私はなんともいえない居心地の悪さを抱えながら、その日の夜は誰とも話をせずに狭い寝台で寝た。

翌朝、ポトラッチの開会の儀があった。私は彼らとともに会場に入場した。相変わらずほとんどの人たちは私に話しかけてもくれないが、Eという男だけは違った。彼は私に伝統的なデザインを施されたベストを貸してくれたが、そのおかげで私は会場に入ることができた（ふつう開会の儀に部外者は入場できない）。会場で私はEの隣に座った。

その日の夜、私はEに誘われてバーにいった。船では、私が船に帰っていないことをみなが心配していたらしいが、そのうちの誰かが、私とEがバーにいったのを目撃したと報告したので、一度は安心したらしい。しかしそれをつかの間、こんどはバーでEがどこかの若者と喧嘩をしていると聞いた彼らは、私とその喧嘩に巻き込まれていないか心配になったそうだ。実際にはその喧嘩が始まる直前に1人バーを離れて船に向かって歩いていた私は、そんな心配もつゆ知らず、船に戻るや「怪我はないか」、「大丈夫か」という質問攻めにあった。その後、私は船の人たちから缶ビールを受けとり、飲むことになった。この日、チーフであるBの長男、Hが私に「俺は数年前に日本にいったんだ」と話しかけてきた。まだ誰が誰だかわからない私であっても、Hがこの船でもっとも偉い人物だというのはなんとなくわかった。Hの会話がはじまるや、昨日何も話しかけてこなかったほかの人たちも一斉に話しかけてきた。「日本ではもうプレーステーション2が発売されているのか」とか「日本の女はどうだ」とか「日本では家の駐車場にも家賃と同じくらいの金を払うとHがいていたが、あれは嘘だろ?」とか。そして最後に、明日一緒に船でキャンベル・リバーに帰ろうと誘われた。

翌日の午後、私はHとその2人の息子たち、その他3人の男（いずれもHの身内）たちと一緒に船でアラート・ベイを発った。その日は途中でオヒョウ、エビ、カニをとり、夕食とした。キャンベル・リバーについて船を下りた私に、Hの次男Nが「これ持っていけ」と、前夜私がおいしいといってたくさん食べたオヒョウの肉を大量にもたせてくれた。

【1】の出来事の後、私はHたちとの間にできたこのつながりを強化したいと思い、Hにもらった名刺の電話番号に電話をし、また会いたいと伝えた。すると、1週間後の土曜日に浜でバーベキューをするからそれに来いといわれた。【2】はそのときの様子である。

【2】約束した日、事前に私はビールを1ケース買ってH宅に電話をした。家にはHの息子であるNの妻Xがおり、彼女が私を迎えに来てくれた。Xは私を浜につれていき、そこで私はHに再会した。Hはそこでベニザケをバーベキューにしていた。

バーベキューができあがると、われわれはHの家に戻った。私はHの妻Cに買ってきたビールを手渡した。Hが作った夕食をご馳走になった後、彼らはビールを飲みはじめた。私もビールをもらったが、そのときNが私に「ドクターペッパー」なる飲み物を飲めといった。これはジョッキにビールとコーラを混ぜ入れた後、そのジョッキにアマレット

という甘くて強い酒をショットグラスごと落として飲むものである。部外者の私でさえ、これは一気飲みしなくてはならないという空気を察することができた。私は下戸だが、これを飲むことを拒否することは事実上不可能だとわかっていたので、結局は飲んだ。思ったとおり、場は一気に盛りあがったが、その後私はさらに3杯同じものを飲まされる羽目になり、最後にはトイレに直行せざるを得なかった。もともと私はその日のうちに帰るつもりでいたが、トイレに直行した段階でその予定を断念した。三男のMは、私に自分のベッドを貸してくれた。そして自分は、隣の部屋にあるビリヤード台の上に寝袋を敷いて寝た。

翌朝、私がリビングにいくと、みな笑いながら「どうだ、ぐっすり眠れたろ」とニヤニヤしながらやってきた。どうやら彼らは最初から私を潰す気でいたらしい。Mが私に朝食をつくってくれた。私はそれを平らげ、昼過ぎに下宿先に帰った。

2つの事例で、私はおおいに施しを受けた。船の寝床のほか、船に乗ってから降りるまでの食事、タバコ、オヒョウの肉、夥しい量の酒、値がはるに違いない寝袋などはその一例である。彼らの歓待の在り様を示すのは、その種類の豊富さや量だけではない。けっして見返りを求めない態度、しかも、私が返礼をちらつかせるとかえって怒られたという点も特筆したい。たとえば、Dに寝袋を借りた私が後日それを彼女に返そうとしたところ、「お前は私たちに（寛大さの）伝統を破らせたいのか」と怒られてしまったことがあった。結局私はこの寝袋を日本に持ち帰ったが、本来高価で質のよいものだったから帰国後もおおいに重宝している。

しかし贈与の側面だけに注目しても、彼らの歓待の本質は見えてこないのかもしれない。私が注意を向けたいのは、【1】のなかの、私が最初に船に案内された日の夜のことである。Dが私を船に連れていった日の夜、彼らは私があたかも存在しないかのように振る舞った。最初私は彼らが私を訝しがっているからだと思ったが、先にも述べたように、2日目の夜に彼らが私に向けた心配は、そうではなかったことを示している。パレスチナ人のキャンプを訪れたジュネの経験は、このとき私が受けた歓待にきわめて近いだろう。ジュネはパレスチナのキャンプで数人の女性たちがお茶を飲みながら雑談している場に招かれた。ジュネはそこにいることを許されたが、誰1人として彼に話しかける者はいなかった。ジュネはひたすら壁と天井を眺めていたという。そこでふと、ジュネは通訳を介してこういった、「あんたたち……もしも旦那連中がね、どこかの男が1人だけあんたがたと一緒にいて、自分らのクッションや毛布の上で寝そべっているのを知ったら、連中何と言うかな?」。全員がどっと笑い、その後彼は会話の中心となった（鷺田 1999: 226-231）。この経験をジュネはこう分析する。じつは彼は、最初から深く迎え入れられていたのだ。「忘れられて、というか知らないふりをされて」ただけで、女たちが自分たちの法のうちにジュネを引き込もうとしなかっただけなのだ。そしてそれによって、歓待は成立していた（鷺田 1999: 231）。

初日に私が船の上でされた仕打ちも、これに近かった。その日のうち、私はジュネと同じように、無視されている、あるいは訝しがられていると考えた。しかしつぎの日にわかったことだが、最初から彼らは私のことを気にかけてくれたのだ。私は客だったからこそ、オヒョウという大きな魚の解体を手伝わずに済み、それをただ見ていることを許されたのだろう。翌日も、彼らは夜になるまで私のことを放置したが、実際にはおおいに気にかけてくれたことは、その後のバーの出来事と、それに対する彼らの心配からすぐにわかる。彼らは私を無視

したのではない。彼らの法のもとに無理やり私を引き込もうとしなかっただけである。鷺田の言葉を借りるなら、それは「ただそばにいる」こと、「無条件のプレゼンス」による歓待だったのかもしれない（鷺田 1999: 204）。

しかしそれだけでこの歓待は成立しなかったのも事実だろう。招かれる私もまた、自分の殻を破って彼らを受け入れられるようではなければならない。当時の私は、船が嫌いで、魚介類が嫌いで、酒が嫌い（これはいまでもそうである）だったが、そういつている暇などないことは、ひしひしとわかった。私は彼らの歓待に答えるべく、自分を変えなければならなかった。今度は私が彼らを受け入れる番である。少々入り組んだ説明になるが、彼らが私を受け入れホストになるためには、まず私が彼らを受け入れなければならない。彼らが私のホストになることを、私が受け入れてはじめて彼らは私のホストになる。もし私が彼らの酒を拒否したらどうなるか。シュリョックが描くペドウィンの伝説のように（SHRYOCK 2008）、死が待ち受けていることはないにしても、何となく大きな問題が起こりそうだというのは肌で感じていた。すでに「ドクターペッパー」なる酒を2杯飲んで自分の限界を悟った後に、さらに2杯飲んだのは、そういう理由だったように思う。

3-2 私を歓待する —— 2000 年以後

【1】からは、クワクワクワクウの私に対する手厚い歓待ぶりがうかがえた。たくさんの物資を与えるだけでなく、見返りを求めず、また無理やり彼らの法に私を引き込まない。これらの歓待ぶりは、シュリョックの論じたペドウィンさながらであり、またデリダの理想とした歓待と同じ姿である。しかしここで、私はこう自問する —— こうした無条件の歓待は、これがファースト・コンタクトであり、しかも私の訪問が短かかったからではないか。これがファースト・コンタクトではなく、また長期間に及ぶなら、彼らの無条件の歓待は精神的にも物理的にも難しくなるのではないか。以後につづく事例は、この点を検討するためのものである。

さて、【2】の後に日本に帰った後も、私はHとメールで連絡をとりつづけた。日本での私は、翌2000年にはじまる本格的なフィールドワークの用意に努めていた。その頃私はすでに、翌2000年をキャンベル・リバーですごすことに決めていた。そこである日、私はHにいい物件がないかを問うメールをだした。【3】はそのときの様子である。

【3】キャンベル・リバーでアパートを借りて1年間住もうと考えた私は、あるときHにメールをだした。その内容はおおよそ以下のとおりである —— 「来年（2000年）1月からその町に住もうと思っているのだが、バチェラー（日本でいうワンルーム）とワンベッド・ルームの家賃の相場を教えてください。自分の知る限りだと、だいたい250ドルくらいだと思うのだが」。これに対する返事は、Hではなく彼の娘であるGからきた —— 「うちの両親が、もしうちに住んでくれたらどんなに名誉なことかといっているんだけど」。そこで私は、Gに対して「では、部屋と食事付で、1ヶ月450ドルでどうかと聞いてみてください」と返した。するとすぐにGから「それでいいってってるよ」という返事がきた。それ以後のメールは、GではなくまたHから来るようになった。

私わざわざこのエピソードをとりあげたのは、当時の私がこの一連のやりとりのうちに、（デリダ的）歓待の精神と、その精神とは反対の利潤追求（もしくは金儲け主義）的な行為の

あいだに揺れ動く彼らの葛藤をみてとったからである。私がHの家に住むならば、当然ながら、毎月彼は私から450ドルのお金を受けとる。Hの多額の収入からして、私からの月450ドルの臨時収入がそれほど大きな経済的意味をもつとは思われないが、それでもけっして悪い話ではない。それ以前の問題に、部屋と食事を提供してお金をとるというのは、現代社会ではごく当たり前のことである。しかし一方で、私は彼らにとって歓待すべき客であり、だとすれば私からお金をとるわけにはいかない。客として迎え入れるべき私からお金をとるというこの矛盾に居心地の悪さを感じたHは、守銭奴としての役割を自分の娘に託し、自分はそのようなお金にかかわる交渉の場から姿を消したのである。カナダについた後にも、これと似たことがあった。最初の家賃を私がHに支払おうとしたとき、Hは私から家賃である450ドルを受けとるのを躊躇した。そして妻のCを呼び、あたかもこの家のお金の管理はCがしているといわんばかりに、お金を彼女に預けた。しかしこの家のお金の管理はH自身がしていたことを私は後で知った。

1999年にHらとあった数日間、彼らは私に無償ですべてを与えた。しかし2000年に私が1年彼らの家に滞在するとなれば、話は違う。彼らにとって、私は1つの空き部屋を利用し、(ちょっと多めの食事を用意する彼らにとっては)食事のあまりをきれいに平らげつつ450ドル払ってくれる、都合のいい客だったのかもしれない(しかしその分私も彼らと生活することで学位を得るための情報を得ていたことは忘れてはならないが)。ここにきてわれわれの関係は、「無償の歓待を施し、施される者」から(近代的な意味での)「契約で結ばれた者同士」のそれに移行しつつあったとみなすこともできるかもしれない。前年の1999年に私がHらと関わったのは、わずかに3日程度である。しかし長期となれば、無償の歓待にも限度があると考えても、おかしくはない。

しかしこの推察に疑義をはさむエピソードがある。【4】はまさにその例である。

【4】私がすでにHの家に滞在してだいぶ経った頃、当時18歳だったHの長女Gにボーイフレンドができた。彼は自宅が近くにあるにもかかわらず、ほぼ毎日Hの家ですごし、Hの家の食事を食べ、Gの部屋で寝ていた。その男はとくに仕事もしていなかった。この状態のまま数ヶ月が経ったあるとき、Hの妻Cが私に愚痴をこぼした。その男は仕事もせずお金もいっさい払わず、ただこの家に居候していると。しかしHが何もいわず彼を住まわせているのでとくに文句はいえないということであった。

Hの家に居候が数ヶ月いるというのは、じつは珍しいことではない。かつてこの家にはJという養子がいて、HらはJが高校を卒業するまで無償で彼を養っていた。また、ごく最近でも、Hの漁船で働くFという男が借金をして財産を失った際にも、Hは数ヶ月にわたりFに無償で部屋と食事を提供した。これらの居候に関して、私にとって意外だったのは、けっしてHらが彼らすべてのことを好意的にみていたわけではないということである。先述のGのボーイフレンドはもちろん、Hの漁船で働くFについてもH家の人たちは好意的にみていなかった。それにもかかわらず、Hらは、彼らが困っているという単純な理由で居候者たちに部屋と食事を提供しつづけたのである。

キャンベル・リバーには学校があるが、その周囲の離島には学校がない。だから離島に住む親が通学のために子供をキャンベル・リバーのある家族に住ませるといことは珍しくない。

しかしそのほとんどが有料である。Hもできることなら、居候すべてから家賃がもらえればもらいたいのかもしれない。現に私は払った。しかしお金に困っている人たちを目にすると、その痛みが理屈抜きでHらにも感じられるのだろう。看護師に「燃え尽き」が多いのは、看護師が患者の苦しみを、それに直面しようとする以前に感じとり、みずからが苦しんでしまうからだという（鷲田 1999: 210-13）。Hの場合もこれと同じであるように思う。GのボーイフレンドもFも、Hらは好意的にみていなかった。しかし彼らは仕事もみつからず、あるいは財産を失って苦しんでいる。その苦しみがHに理屈抜きで感じとられ、その結果Hは彼らに施すのではないか。

他方、家賃を払った「優等生」の私とHとの関係は、多少の変化をみせたように思われた。家賃を払う私は家賃を払わない居候より信用をされているように私は思ったのである。もちろんこの信用は、私が毎月家賃を払うという事実にもとづいており、その意味で「信用貸し」にもとづく現代のクレジットカード制度の原理となんら変わるものはないが。私はもう「無償の欲待」を受けることはないが、そのかわりに（クレジットカード制度と同じ意味での）信用を手にした。少なくとも私はそのように理解していた。しかしこの理解に釘をさすようなエピソードが2006年にあった。【5】はその事例である。

【5】2006年、私はいつものように夏から秋にかけての1ヶ月をHの家で過ごした。その滞りも終わり、いよいよキャンベル・リバーを発つ日の朝、私は前もって予約してあったレンタカーを借りるため、レンタカー会社にいった。しかしその会社の機械が私のクレジットカードを受け付けなかったため、車を借りることができなかった。ふつうならばこういうときには別の交通手段（1日1本しか走っていない長距離バス）を使うのだが、その日はそうもいかなかった。なぜならその日の昼には私は車を返すはずのナナイモという町で、日本から訪ねてくる友人と待ち合わせをしていたからである。とにかくそのレンタカー会社は、私のそのような事情を汲み取ってくれる気配はないので、私はいったんHの家に戻った。

事情を聞いたHは、町にあるもうひとつのレンタカー会社についてみようとして、その会社がある空港に私を連れていってくれた。車のなかで私は「でも、俺のクレジットカードの磁気の問題があるのなら、どのレンタカー会社についても同じことじゃないのか」と尋ねると、Hはこういった——「俺のを使えばいいさ」。

私は何もいわなかったが、こんな空想をしていた——「もし俺が来年戻ってこなかったら、レンタカー代の500ドルを俺は踏み倒すことになるなあ」。もちろんこれはあくまで空想であり、実際にそんなことはあり得ない。しかし理念上はあり得る話だし、それはHもわかっていたはずである。しかしそれでもHは私のレンタカー代500ドルを立て替える気でいる。ここで私は、このように考えた。Hは私を信頼しており、絶対に来年また帰ってきてHにお金を返してくれると考えているのだと。

理由はわからないが、空港のレンタカー会社では私のクレジットカードがふつうに使えた。だから私はHの500ドルを踏み倒す機会を逸したことになるのだが、それでも彼に信用されているという感覚は失われることがなかった。

その翌年、私は酒の席でこの話をHにふってみた。そこで私は、自分がとんでもない間違いをしていたことに気がついた。Hにとって、私が翌年またカナダに帰ってきて彼

にお金を返すかどうかはどうでもよいことだった。そうではなく、最初からレンタカー代は返ってこないものとして、私のためにお金を払おうとしていたのである。「困っている人がいる、だから与える」のである。「理由も関係なく、返済も求めない」。

【5】の最後にふれたHの言葉は、信用されていると思った私をがっかりさせはしたが、同時にHらしいという印象を与えた。いや、Hだけでなく彼の家族におおよそあてはまる行為なのかもしれない。科研費を使ってカナダに毎年やってくる私は、金銭的な苦しみを味わうわけではない。しかしこのとき私は不意のアクシデントに困っていた。困っていたからこそ彼は私に施そうとした。それだけである。このとき、私がどんな人物なのか——かつてしっかりと家賃を払いつづけていた「優等生」で、毎年彼のもとを訪れる博士で、日本の国立大学の准教授であるという属性——はHにはほとんど関係がなかったように思う。このときの私は、GのボーイフレンドやFのように、ただ単に困っている人物でしかなかった。私は、自分は信頼されており、特別なのだと思いたがったが、現実はそうではなかったのだろう。単に私は困っていたから助けられたのである。

困っている人を無視できず、理屈抜きでもてなすというのは、デリダが紹介するエピソードにもしばしば登場する。しかもその際に、自己犠牲は付き物である。男の客人をソドムから守るためにみずからの娘たちを差しだした例などにもわかるように（デリダ 1999: 147-50）、歓待はみずからを犠牲にする。このとき、私が誰であるか、私の名前が何であるかは問われない。

【5】のできごとがあった同じ年、Hはフード・フィッシング（自給用におこなう漁）をおこなった。水揚げの際、ベラ・クーラの村からきたと自己紹介する2人の少女がHのもとにやってきて、自分の村には今年サケがないからわけてほしいと頼んできたことがあった。それに対し、Hは彼女たちの出自を確かめることもなく数十尾のサケを彼女たちに与えた。Hにとって、困っているという事実以外に歓待をおこなう大義名分は必要なかったかのようである。それが誰であるかはどうでもいいことであった。

これまでのエピソードでは、Hたちは施すばかりであった。しかししばしばその反対の事例もある。【6】はそうしたエピソードである。

【6】Hの長男Iは、しばしば私にお金を借りに来た。仕事が終わって飲みたいが給料日までお金がない、20ドル貸してくれというパターンである。これが積み重なり、いつしか借金は500ドルまで膨れあがった。私は借金のことをHと彼の妻Cに伝え、「今月家賃は払わない、それはIから受けとってくれ」といったことがある。HとCはそれを了承したが、彼らがIからお金を徴収したとは考えられない。

Iについてはもう1つ、当時の私には不可解だったエピソードがある。給料の小切手を受けとった日、彼は私をふくむ5人の男たちに「飲みに行くぞ、俺の奢りだ」といって全員の酒代をだしたことがあった。バーでIは数百ドル払い、またタクシーの運転手にも100ドルのチップをあげていた。そのとき私は「人に奢る暇があればまずは借金を返せ」と思ったものだが、彼は酒を奢ってもお金は返してくれなかった。

Hの次男Nは人望の厚い人物だが、彼にも一度だけ同じようなことがあった。私が帰国間近で所持金も少なくなっていたとき、Nが酒代として100ドル貸してくれと頼んできた。私は「1週間後にこの家を発つからそれまでに返してくれ」と念を押したが、結局

彼は返してくれず、私はその 100 ドルを受けとらないままキャンベル・リバーを発たなければならなかった。その後私は、日本に帰国するまでのバンクーバーでの滞在期間、きわめて質素な生活を強いられた。

人類学者であればほとんどの人が経験すると思われるこの手のエピソードを、歓待論からどう分析するかは難しい。しかしこの事例から明らかなことが、少なくとも 2 つある。

彼らが身内に「貸してくれ」という場合、それは「くれ」の婉曲的な表現にすぎない。彼らは与えるときも与えられるときも、返済を念頭においていないのである。私が仮に「100 ドル返せ」といま N にいったとするなら、N は「ああ、わかった、今度ね」というだろうし、それにもかかわらず返さないだろう。しかし同時に、「だったらあのとき俺がお前に買ってあげた〇〇の分を返せ」とも絶対にいわないだろう。彼らはもののやりとりを双方向的な交換としてではなく、一方向的な贈与としてとらえる。だから「借りたものは返す」という考えには馴染みがない。彼らにとって、この考えはいわばクレジットカードの時代が生み出した異質な産物なのである。

ただ、それはあくまで身内の場合である。近代産業の世を生きた彼らは、もちろんクレジットカードの時代がもたらした「借りたものは返す」という理念、およびその理念を守ることによってはじめて得られる信頼という理念を知っている。その点でいうと、むしろ私のこの社会における立ち位置こそが変化していったのだろう。ファースト・コンタクトであった【1】のときの私は、丁重にもてなされる客であり、彼らの法の外部にいた。しかし時を経た【6】のときの私は、明らかに彼らの法のもとで生活することを求められている。これは私が彼らの身内として数えられはじめたことを表すものと考えていいように思う。うぬぼれともとれるこのような考えを私が明示できるのは、ファースト・コンタクトから 10 年たった 2009 年、私がポトラッチで公式に彼らの親族として受け入れられた事実があるからである。

いまの私は、もちろん I や N が私から借りたお金を返さないということを根にもってはいない。しかしそれは、根にもつにはあまりに時間がたちすぎたからではない。私はいつしか—— 科研費をもらうようになってから——「彼らに与えた以上のものを俺は彼らから受け取ってきた」と考えられるほど、経済的にも精神的にも余裕をもてるようになったからである。私が学位をとり、就職し、科研費でカナダにいけることと、この種の余裕が無関係ではないことを白状しなくてはならないだろう。しかし、I も N も「いままで施しを受けてきたから……」という私が抱いたある種「みみっちい」発想はもったことがないはずである。「施しを受けたから施した」というのは、レヴィ＝ストロース流の交換の考えであり、また近代的なクレジットカード制度の産物である。対して N や N の考えは、あくまで一方向的な贈与、見返りを求めない贈与だったに違いない。

4 終わりに

以上にあげてきた 6 つの事例から何が語れるか。ここではつぎの 3 つの論点にそってごく簡単にではあるが、分析したい。

第 1 に、クワクワカクウが私に対しておこなってきた歓待はデリダの歓待、つまり「名も聞かず、条件もつけない」無限の歓待か、それともカントが想定したような条件付きの歓待か

という点である。このような問いをたてておきながらいうのもどうかと思うが、結論からいうと、ある歓待をデリダ的な無限の歓待／カント的な条件付歓待の二元論に還元してしまうことには抵抗がある。客を無制限にもてなしたい、しかし客に制限をつけたい、客からお金をとりたいというジレンマは、Hたちだけでなく誰でも抱えている。このジレンマにどう対峙し、それをどう解消するか、そのプロセスをみるのが人類学の歓待論に求められているだろう。

第2の論点は、彼らの歓待は、彼らが寛大さに長けたクワクワカクゥであるという事実と関係があるかという点である。明らかに彼らの態度や言説には、みずからクワクワカクゥであるという自己認識に影響されたものがあるのはたしかだ。とくにその影響は、寛大さを美德とし、過度の利潤追求を批判する言説の形成に大きい。私が寝袋を返すときに怒ったDの語りなどはその端的な例だろう。しかし私は、彼らのもてなしをクワクワカクゥ独自のものとみなすことには抵抗がある。私からの家賃を躊躇しながらも受け取るHの姿、あるいは娘のボーイフレンドに愚痴をこぼしながらも部屋と食事を無償で提供するCの姿、ただ「困っているから」私や他の人びとに施しをするHの姿には、太平洋を隔てた現代にすむわれわれ日本人にも共有できるところが多々ある。これは、鷺田がいうところの「苦しみに対峙しようとする以前に苦しみを感じてしまう（鷺田 1999: 152）」われわれ人間全般にいえる性ではないだろうか。彼らのもてなす、それは客が困っているからだ。そして日本でも看護師の燃え尽きがあるのは、患者の苦しみが考える前に感じとられるからなのだ。

しかし最後に、こう問い直すことができるかもしれない——「Hが私からの家賃を受け取るのに戸惑いをみせるとしても、それを結局うけとるのは、彼らが昔ながらの歓待から速ざかり、現代の利潤追求型の歓待、いいかえれば条件付の歓待になじんでしまったからではないか」。ここでは「過去の歓待」と「現代の歓待」が区別されることになる。先に私は、ある歓待の在り様をデリダ的歓待／カント的歓待の二元論に還元することには意味がないと主張したが、分析概念として、過去の歓待と現代の歓待を区別することは有効であると認めたい。なぜなら、人びと、とくに「歓待に長けた民族」とラベル化されてきた人びとにとって、この両者の区別はみずからの歓待の在り様を自己認識する際の概念的な道具として作用している可能性が高いからである。冒頭でも述べたように、ベドウィン「本当の歓待は古い時代の遠いところにある」という言説を繰り返している。クワクワカクゥはどうだろうか。私はおそらくそうだと考えているが、これを詳細に検討するのはまた別の機会にしたい。

謝辞

歓待についてのこの研究ノートは、さまざまな方から受けた刺激と情報をもとに作成した。そのなかには、歓待という研究テーマと文献情報をくださった方、ご自身がおこなっている接客と接客上の悩みをざっくばらんにお話しくださった接客業の方、「苦痛」ならびに「苦痛の苦痛」というレヴィナスの概念を私に身をもって経験させてくれた方、患者の苦痛の受けとめ方を真摯に告白してくださった看護関係の方などたくさんの方がいらっしや、それらの方々の名前をここにすべて書き記すことはできないが、感謝の意を表したい。

また、この研究ノートに掲載されている事例の約半分は、過去に私が得た科研費によるフィールドワークが舞台となっている。日本学術振興会にはおおいに感謝している。

注

- (1) デリダ以後、カントが言及した歓待は「本来的ではない歓待」、「悪しき歓待」として批判に晒されてきたが、シェレールはカントの論に対して別の解釈を示し、部分的に弁護している（シェレール 1996: 第2章）。

参考文献

- BARNETT, H. G., 1938, “The Nature of the Potlatch”, *American Anthropologist* 40 (3): 349-58.
- BOAS, F., 1897, *The Social Organization and Secret Societies of the Kwakiutl*. United States National Museum, Report for 1895.
- CANDEA, M. and G. DA COL, 2012, “The Return to Hospitality”, *Journal of Royal Anthropological Institute* N.S., 1-19.
- デリダ、J., 1999, 『歓待について——パリのゼミナールの記録』廣瀬浩司訳、産業図書。
- HUNT, G., 1906, The Rival Chiefs: a Kwakiutl Story. In *Anthropological Papers Written in Honor of Franz Boas*, New York: G. E. Stechert and Co., pp. 108-36.
- カント、I., 1985, 『永久平和のために』宇都宮芳明訳、岩波書店。
- レヴィナス、E., 2005, 『全体性と無限（上）』熊野純彦訳、岩波書店。
- モース、M., 2009, 『贈与論』吉田禎吾訳、ちくま書房。
- モーガン、L. H., 1990, 『アメリカ先住民のすまい』古代社会研究会訳、岩波書店。
- PIT-RIVERS, J., 1968, “The Stranger, the Guest and the Hostile Host: Introduction to the Study of the Laws of Hospitality”, in *Contributions to Mediterranean Sociology: Mediterranean Rural Communities and Social Change*, J. Peristiany (ed.), Paris: Mouton, pp. 13-30.
- 1992, “Postscript: the Place of Grace in Anthropology”, in *Honor and Grace in Anthropology*, J. Peristiany and J. Pit-Rivers (eds.), Cambridge: Cambridge University Press, pp. 215-46.
- シェレール、R., 1996, 『歓待のユートピア——歓待神礼讃』安川慶治訳、現代企画室。
- SHRYOCK, A., 2008, “Thinking about Hospitality, with Derrida, Kant, and the Balga Bedouin”, *Anthropos* 103: 405-21.
- 鷺田 清一 1999 『「聴く」ことの力——臨床哲学試論』TBSブリタニカ。